

児童の福祉を見つめる

—児童福祉の思想と子どもの権利条約の背景—

野 島 正 剛

1 はじめに

我が国が子どもの権利に関する条約に批准したのは1994年4月22日である。それに伴い、国内法の整備が行われ、児童福祉法をはじめとした関連諸法令の改定が行われた。それから10年以上が経過し、子どもの権利に関する条約が様々な場面で活かされているかのように見える。特に「子どもの最善の利益」という言葉は、様々な場面で用いられるようになった。しかし、我が国の子どもを取り巻く環境は批准当時よりも悪い状況にあるのではないかと感じる。少子化、児童虐待、子どもが巻き込まれる事件・事故などが報道されない日はない。「子どもの最善の利益」「子どもの権利」という言葉だけが我が国において一人歩きし、実態が伴っていないかのようである。そこには、「子どもの権利に関する条約」や「子どもの最善の利益」「子どもの権利」の背景が理解されないまま用いられていることが原因ではないかと筆者は感じている。

子どもの権利に関する条約はポーランドの提案によるものである。その提案理由の背景にはヤヌシュ・コルチャックの思想が活かされている。コルチャックの名前は我が国においては「コルチャック先生」と題した劇や映画で多くの人に知られるようになった。しかしそれはコルチャックのごく一部が演じられたものであり、国民の多くはコルチャックがどのような人物であり、どのような思想を持っていたのか知らない状況にある。

そこで本稿では、子どもの権利条約の思想的背景と我が国の児童福祉に影響を与えたヤヌシュ・コルチャックの生涯と著書を整理し、コルチャックの思想に触れることで、今後、子どもの福祉を見つめるための参考にしたい。

2 ヤヌシュ・コルチャックの活動と著書

1. ヤヌシュ・コルチャック

ヤヌシュ・コルチャックは1878年7月22日、父・ユダヤ人弁護士ヨゼフ・ゴールドシュミットと母・ツェツィリアの間に生まれた。コルチャックの名はペンネームであり、本名はヘンリク・ゴールドシュミットである。「生まれた当時の名前はヘルシュだったが、ヘンリクというキリスト教風の名前で呼ばれていた」⁽¹⁾とする文献もある。

コルチャックの作品と生涯については我が国におけるコルチャック研究の第一人者である塚本⁽²⁾が整理し、年譜を作成している。そこで、塚本の年譜に沿いながら活動と著書を整理したい。

塚本智宏は著書の中で「本書は、コルチャックからの長い引用が少なくない。コルチャックの思想を紹介しようとすれば、それにまだなじみの薄いわが国でそれを可能な限りコルチャックの原典にあたり、コルチャックの言葉をもって研究すべきと言う意味では当然といえば当然である。しかし、それだけではない。要約、概念化が非常に困難であるからだ。彼は難解な概念を使わないかわりに、要約の困難な、他の説明では決してなしえない、その都度厳密な個別具体的な説明をもって理論を展開する。また、詩的な文章の運びが、ある文章だけを抜き出すと、人によっては全く別のインスピレーションを呼び起こし、文章とは異なってそれが独り歩きする危険性があるのである」⁽³⁾としコルチャック研究の特殊性を指摘している。本稿でも長い引用の箇所が多いが、塚本の指摘を踏まえた。

2. 幼少期

1878（1879？） 誕生

1885（1886？） 学校（ギムナジア）入学

1896 父の死

以下、年譜は塚本が作成した「コルチャック作品と生涯」による（塚本智宏 ヤヌシュ・コルチャック「子どもの権利」の探求 紀要第2号

コルチャックの曾祖父はガラス職人、祖父は医者、父は前出のように弁護士であった。

この頃のポーランドはウィーン会議で3つに分割された状態にあった。その中でポーランド王国では「ロシアの工場地帯」と呼ばれるほどの工場があり、農村地帯から移ってきた農民や出稼ぎの季節労働者が働いていた。同じようにユダヤ人の村から移ってきた人々は生活習慣をポーランド人に合わせ、徐々に豊かな生活を行うようになった。このポーランド人への同化は、社会的地位の向上を意味するものであった。

コルチャックは、大人は自由で偉大だと思っていた。その中でも最も偉大な大人は大好きな父ヨゼフだと思っていた。ヨゼフは家中の時計のゼンマイを巻くことが日課であり、時間を支配する人のようにも思っていた。しかし、父は精神的な病から精神病院に入院し、ゼンマイを巻くこともできなくなった。コルチャックは父が精神病院に入院していることが耐えられないでおり、父が亡くなったとき神に救われたような気持ちがあったという。この出来事は、コルチャックの将来に大きな影響を及ぼし、病気が遺伝するのではないかと不安になり、一生独身を貫くことを決意させた⁽⁵⁾。

コルチャックは級友に大人になって実行したい事として、「軍隊をもつ代わりに、国が工場を作って、役に立つ物を製造して、人々に職場を用意する。貧しい人たちに安酒を飲ませる代わりに、金を与える。金は人間らしく生き、成長させるための資本だ。また才能のある若者は、そんな社会階層の出身であれ、援助が与えられるべきだ。だが、遺伝する危険のある病気をもつ者は、結婚して、子どもをもうけてはならない。」と語っている。当時の社会は人口の移動が激しく、農村部から都市部に流入する人々が工場の労働力となった。そのため低賃金で雇うことができ、1日16時間の労働であっても生活することができない程の低賃金であった⁽⁶⁾。このようにコルチャックは当時の社会情勢に加え、自分自身の不安を反映させた思いをもっていた。

3. 青年期

- 1898 ワルシャワ大学入学 移動大学
 (「さまよえる大学」) に学ぶ
 慈善協会施設で非合法教育活動

コルチャックは医師になる決意をし、大学進学を行う。当時のワルシャワ大学は学生運動が盛んであり、学生が多数逮捕された。学生シンパの教員は教壇を追われた。そのため非合法の移動大学「さまよえる大学」が誕生した。この授業は非合法であったため、逮捕される危険を冒しながら参加しなければならなかった。コルチャックはこの「さまよえる大学」の授業で学ぶほか、無料貸出国民図書館で働いた⁽⁷⁾。

- 1898 著作活動開始 戯曲「どの道」を執筆
1899 「19世紀隣人愛思想の発展」(『みんなの読書室』) 発表
 無料読書会活動積極関与のため逮捕拘留
 クシィヴィツキ(資本論翻訳者)との出会い
1901 「街頭の子ども」
1904 「サロンの子ども」

コルチャックは著作活動を開始したが、その際に用いられたのが「ヤヌシュ・コルチャック」のペンネームである。貧困と犯罪の多い街の中に入り、子どもたちの話しかけ、耳を傾け、面倒を見てもらえない子どもをワルシャワ慈善協会の施設に連れていく生活をおこなった。その経験が長編小説の「街頭の子ども」となった。また「サロンの子ども」は自分自身が過ごした市民社会を題材にした長編小説である。

コルチャックは小児科を専攻したが、興味の幅は医学にとどまらなかった。⁽⁸⁾

1899年発行の「みんなの読書室」において「19世紀隣人愛思想の発展」を書いている。コルチャックはそこに「子どもはだんだんと人間になるの

ではなく、すでに人間である」「彼らの理性に向かって話しかければ、我々のそれに応えることもできるし、心に向かって話しかければ、我々を感じとってもらえる。子どもは、その魂において、我々がもっているところのあらゆる思考は感覚をもつ才能ある人間なのである」と書いた。前の部分では子どもの定義を行っている。この定義は、この後のコルチャックの基本的な考え方として、他の作品にも登場している。また、後半部分においては、子どもを才能ある人間として尊重するように訴えている⁽⁹⁾。またこの論文の前書きには「何世紀にもわたる間に、人間はそこに新たなる隣人を招き入れてきた」「あなたの隣人として、貧しき人々も、女性も、子どももいる。それらすべてを愛するとともに、貧しき人々を、女性を、そして、子どもを尊重されよ」と書かれている。塚本は⁽¹⁰⁾「彼は子どもを、『貧しき人々』『女性』とともに『人間』が愛し尊重すべき『隣人』の一部をなす対象として位置づけている」ことに注目している。

4. 大学卒業後

1905 ロシア革命 ロシア各地に民族運動
 大学卒業
 小児病院に勤務
 「現代の学校」発表（『声』）
 極東での露日戦争従軍医として参加

大学を卒業したコルチャックはバウマン＝ベルソン小児科医院に勤務するが、ユダヤ人であることで出世や高収入の道は閉ざされていた。しかし、コルチャックの小説などが評判になり、上流階級から往診の依頼が来るようになる。貧しい人々には無料で治療を行う一方で、上流階級からの往診には法外の診察料を要求した。

従軍医として参加した日露戦争では、ロシア軍内部の悲惨な状況から暴動がたびたび起こった。また戦争による経済危機のためロシアとポーランドでは抗議デモが相次いでいた。集会で労働者が射殺されるなど、デモ隊

と制圧しようとする軍が衝突し、負傷者が相次いだ。軍から戻ったコルチャックはその負傷者の手当てを行ったが、その中で犠牲となった子どもも少なくなかった。コルチャックは子どもたちは誰よりも搾取され、権利を持たない、一番不利な立場にいると考えていた。その頃のコルチャックは子どもを「小さな足のプロレタリアート」と呼んでいる。コルチャックはある将軍とやりとりをしている。「ワルシャワは、3分の1の住民に対してなにもしていません」と話すコルチャックの言葉の真意を将軍は掴めなかった。コルチャックは子どものことをいっているのだと説明すると、将軍は「子どもが住民だと考えてみたこともなかった」と言った。それに対して「子どもは人間になるのではなく、既に人間なのです」と答えた。この言葉がコルチャックの教育の根本を支えることとなった。⁽¹¹⁾

1906 同年以降ドイツ・フランス・ロンドン等へ短期留学

1907-08 ワルシャワ郊外で夏期コロニー体験

後に体験記を書く。

コルチャックはロンドン、パリ、ベルリンへ研修旅行した。ロンドンでは孤児院や感化院を訪ねた。パリでは精神科の聴講を行い、ベルリンでは小児科医を訪ねるなど、非常に強い影響を受けている。

また自分の休暇を犠牲にして貧しい家の子どもとサマーキャンプに出かけている。その際、数人の少年がコルチャックに反抗した。子どもたちの寝室に入ったとき、子どもたちが口笛を吹くなど、拒絶の態度を経験した。コルチャックは「うるさい」と怒鳴った。この夜、コルチャックはこの拒絶は一種の権力闘争で、子どもたちはワルシャワの貧民街で作り上げてきた主導権をサマーキャンプでも守ろうとしていることに気がついた。「わたしは、腹をすかせた子や親に見捨てられた子に、いい印象をもたれたいがために白い手袋をはめ、衿にはいつも花をさしていた。そしてやさしいそぶりをし、安っぽい花火で受けようとするばかりで、自分がしなければならぬ義務を怠っていた。わたしは、子どもたちの名前を覚えきれず、

洗濯物を渡しまちがえ、トイレを清潔にすることを忘れていた。わたしは、子どもたちが自分に心を開いてくれることを期待しながら、自分のほうは、都会の生活で植え付けられた子どもたちの過ちをわかろうとしなかったのだ……」⁽¹²⁾と反省した。その翌日子どもたちに過ちをわび、今後の話し合いがもたれた際、コルチャックは合意したことを文書にすることを提案した。これをきっかけに、「正義と約束と契約というコルチャックの〈子どもの民主主義〉がはじめて試みられた。『子どもたちは励ませば協力するし、軽視すれば傷つく存在なのだ。そのことをわたしは理解した』」⁽¹³⁾

5. 孤児院主宰

- 1910 『モシキとヨシキとスレたち』
(ユダヤ人の子どもたちとの夏季コロニー体験記)
- 1911 病院をやめ孤児院主宰開始
『ユシキとヤシキとフランキたち』
(ポーランド人の子どもたちとの夏季コロニー体験記)

この頃のコルチャックの夢は生活のための学校である。生徒は好奇心に基づいて知りたいと思ったことを実際にやってみる。他人を尊重し、思いやりを持ち、注意深い観察者として大人と議論できるようにはならない。心をねじ曲げず、自由なまま、世の中に出ていき、自分と共同体のために意味ある仕事をいとわない。このように人間が変わるのは生活環境と教育によってだと考えた。この生活のための学校は、幼稚園と学校と寄宿舎と孤児院が合体したもので、町工場や病院、図書館、銀行、職業斡旋所が組み合わさったようなものだという。この施設の原型は、孤児院や教育機関を経済的に支えていた「ワルシャワ慈善協会」であった。その他、ワルシャワには福祉団体が存在していた。これは、自力救済が社会的な伝統であったためである。

ユダヤ系の「孤児救済協会」が新しい施設の設置を決定し、その運営をコルチャックに依頼した。⁽¹⁴⁾

1914 第一次世界大戦でウクライナへ従軍医として派遣
キエフでマリア・ファルスカ院長の児童施設に支援開始
戦時中『子どもをいかに愛するか』の原稿執筆

「子どもをいかに愛するか」での「子どもを愛すること」とは、子どもを正しく育てることを意味している。乳幼児の保育や、子どもの個性や、子どもが必要としているものを知り、それを大切にするのが親の努めであると書かれている⁽¹⁵⁾。この「子どもをいかに愛するか」は、コルチャックのもっとも重要な子育て・教育論であり、初めての子どもの権利宣言とされている⁽¹⁶⁾。この作品においては、「一個の人格として、人間として、その瞬間瞬間において、自らの意思で、主体的に生きている子どもの姿を示すこと、つまり、子どもが『だんだんと人間になるのではなく、すでに人間である』ことの実証である。

まずは、退治が出産開始の瞬間に『自分の人生を生きたい』と語っていると洞察することからはじまり、乳児は、すでに『それ自身、生まれつきの気質と知性の諸力と心身の感覚と生きた経験から成り立つ、ある人格、厳密にいえば、一個の人格である』と述べ、それは『際限のない無学と見解の浅はかさだけが見落とす』ものだとその人間性を強調する。そして、ひき続き、幼児がいかに自己を探求し、『生活』しているのかを例証していくのである⁽¹⁷⁾と解説している。

また「ある駅でコルチャックは、五歳前後の少女が母親に平手打ちされて、唇から血を流すのを目撃したことがある。その少女はただ叔母のところへ駆け寄ろうとしたただけであったのだ。

『おとなしくしているんだよ!』

少女は唇の血をハンカチでぬぐった。だが母親たち大人は、そばで泣いている者など一人もいないとでもいうように、楽しそうにおしゃべりしていた。

『これがもし子どもではなく、大人が人混みの中で理由もなくなぐられた

ら、どうなるだろう？どんな騒ぎになったか知れたものではない！』

コルチャックは怒りをこめて、こう書いている。

『私は要求する。子どもに対する見せかけだけの優しさや憐れみなどいいかげんにやめることだ。そのかわりに、子どもがどんな権利をもっているか考えるべきだ』⁽¹⁸⁾ と、子どもの権利についての根本となる考え方が示されている。

1916年、コルチャックはキエフで小児科医として働く事になる。このとき、ポーランドの戦争孤児のためのホームを開いていたマリナ・ロゴフスカ・ファルスカと出会い、生涯続く友人となった。⁽¹⁹⁾

6. ポーランド独立

1917 ロシア二月革命、十月革命

1918 ポーランド独立

『子どもたちをいかに愛するか—家庭の子ども—』の出版

1919年にコルチャックはワルシャワに戻るが、マリナもワルシャワに移り、ポーランド人孤児のためのホームを設立する。労働組合からの支援は少なく、石炭やジャガイモの寄付でも小躍りするほどであった。⁽²⁰⁾

1921 『春と子ども』

『教育の諸要因』

1922 (1923) 『マチウシ王一世』

1923 『孤島のマチウシ王』

1924 『幼きジャックの破産』

1925 『もう一度子どもになれば』

『理論と実践』

マチウシ王一世にはコルチャックの子ども時代を思い起こさせる場面が多く、父の死と父王や、カナリアの死のエピソードなど、マチウシの物語

はコルチャックの人生とつながっている部分が多い。また1922年にはポーランド初の大統領が暗殺され、1926年にはクーデターが起こるなど、平和にはほど遠い時代であり、コルチャックは民主主義と団結を求める物語を書いたが、その思いは実現する事はなかった。⁽²¹⁾

- 1927 『衛生と教育』
- 1929 世界大恐慌、経済危機の深刻化
『子どもの権利の尊重』
『子どもをいかに愛するか』第2版
- 1930 『生活の規則（人生の掟）』

コルチャックのこの頃、子どもが大人と同じ人間であることを繰り返し言っている。

「コルチャックはことあるごとにいっている。

『子どもは人間だ。人間だが、大人とは違う考え方をし、経験したことも欲求を覚えることも感じ方も違う。だからといって、子どもたちは未熟なのだろうか？

それなら老人にたずねてみるといい。あなたがたとえ四十歳でも、老人はあなたのことを未熟だというだろう。どの社会階層も未熟だ。だから、どこにでも弱点がある。そしてどんな民族も、他の民族ともちつもたれつの関係にある。なのに、どの民族もやはり未熟だ。だから大砲を捨てられない。』⁽²²⁾

1929年に出版された「子どもの権利の尊重」は子どもを愛する呼びかけはなく、大人の世界に対する非難が書き綴られ、悲観的な内容であった⁽²³⁾。塚本は「子どもの権利の尊重」を次のように解説している⁽²⁴⁾。第1章の「軽蔑と不信」は、大人社会における「しばしば過ちを含む解決」の後に、二次的な問題として子どもの問題への解決がはかられる子ども軽視を批判している。そして、子どもの意見や同意が考慮されず、頭越しに行われ、子どもは時に疑問や抗議を行うが、大人は聞く耳を持たない状況に対して、

コルチャックは子どもの意見，疑い，抗議を大人は聞き入れるべきだとしている。

また第2章の「憎悪」では，子どもの組織と子どもの運命に関わる大人社会に対して，子どもが識者として参加することを要求している。これは終章で，「子どもとは何か。これは，大衆であり，意志であり，力であり，権力である」という言葉で結論づけられている。

1935年から翌1936年にかけて『老博士のおはなし』というラジオ番組に出演している。開始当初からユダヤ人が番組に出演することが難しい状態であり，コルチャックは名前を伏せていたが，突然番組が打ち切られた。このことにコルチャックは大きなショックを受けている。⁽²⁵⁾

7. ドイツ，ポーランド侵略

1939 『おもしろ教育学』

ドイツ，ポーランド侵略

1940 ワルシャワ・ゲットー

1942 コルチャックと孤児院の子どもの「最後の行進」

トレプリンカへ

1940年，ユダヤ系市民のゲットーに移住を命じられた。コルチャックはゲシュタポ本部に抗議に行き，その場で逮捕された。尋問と殴打を受け，政治犯を収容する刑務所に投獄された。コルチャックを保釈するために，寄宿生たちが保釈金を集め，救い出した。⁽²⁶⁾

1942年8月4日，コルチャックの日記はこの日を最後に，書かれることはなかった。8月5日，「ワルシャワ・ゲットー史の研究者エマヌエル・リンゲルブルムが，ユダヤ教区事務員ナフム・レンバの証言を採録している。

『ぎっしりとならぶ人の群れ。ムチにせかされて動いていく。とつぜん積換場の指揮官がホームの子どもたちを連れていくように命令した。

その先頭にコルチャックがいた。そのときの光景を，わたしは決して忘

れないだろう。

屠殺場へつれていかれる家畜のような人の群れと対照的な行進がはじまった。子どもたちは四列になり、先頭がコルチャック。みんなまっすぐ空を見ていた。第二班はステファ夫人が先導し、第三班はブロニアトフスカ。子どもたちは青いリュックサックを背負っていた。第四班を引き連れていたのはトワルダ通りの寄宿学校のステルンフェルドだった。……

ユダヤ人警官が直立不動の姿勢になって敬礼をした。ドイツ人たちがコルチャックを見て、尋ねていた。『あの男は誰なんだ？』「コルチャックは、二度とワルシャワに戻ってこないこと、そして途中で牛乳をくれる人など誰もいないことを知りながら、子どもたちの先頭に立った。窓のない家畜運搬車で運ばれるのは、子どもでも、大人でもない。それは屠殺される家畜だ。

彼らは生きる屍だった。目的地に着けば、射殺されるか、ガス室送りと決まっていた。」⁽²⁷⁾

この積換場を最後に、コルチャックと子どもたちの消息は分からなくなった。

3 第二次世界大戦後—おわりにかえて—

1978年～1979年はユネスコがコルチャック誕生100周年を記念して、コルチャック年に定めた。前述のようにポーランドで生まれ育ったコルチャックは、ヨーロッパにおいては広く知られている。

子どもの権利条約の成立には、1959年の権利宣言をポーランドが条約へ変更するよう強く求めた背景がある。ポーランドの国土は第二次世界大戦の戦火により壊滅的な被害を受けている。人的被害においては、ナチスによる民族の絶滅計画が行われ、国家はおろか民族の存在が危ぶまれた時期を経ている。これを塚本は「子どもの権利条約とコルチャック、両者の間はポーランドの子どもの歴史を媒介にして、そして、原案作成に当たったポーランドとポーランドの遺産としてのコルチャックという形で結びついている」⁽²⁸⁾と解説している。

子どもの権利条約の作成の中核的存在であったウォパトカは、1996年の「国連子どもの権利条約の紹介」において、「条約は『子どもというもの』が単に配慮とケアの対象ではないということ、むしろ子どもというものは基本的な権利と根源的な自由の主体』」「条約が、『子どもは人間 (a human being) なのであり、人間の胚 (germ) なのではない』との認識に立っている」「第二次世界大戦以前、ヤヌシュ・コルチャック－ポーランドの有名な教育家－は、その『子どもの権利の尊重』について書いている。彼は子ども時代というのは、前人間的状況のことをいうのではなく、人生の一構成部分であるとの立場をとった。子どもは人間としての尊厳を承認されるに値する。そういう人間なのだというコルチャックの洞察を世界中が確認するまでに半世紀以上かかったのである」⁽²⁹⁾と条約について説明している。コルチャックの考えを世界各国が理解し、同意するために半世紀以上もの時間が必要であった。その間、多くの子どもが犠牲になっている。

子どもは徐々に人間になるのではなく、生まれながらに人間なのだという基本的な考えは、現代の児童福祉を見つめる上で非常に重要な視点を我々に気づかせるものである。子どもは単にケアの対象ではなく、子どもが権利の主体であり、最善の利益を子どもとともに考えながら支援することが必要である。しかし、子どもが権利の主体として、自己の利益のみを追求するエゴイストであっては、本来的な最善の利益にはつながらない。生まれながらに人間であり、老いても人間であり、将来老いたときのことを見据えつつ、いま何が必要なのかを、ともに考えることが子どもの福祉を実践する際の第一歩ではないだろうか。

引用文献

- (1) MONIKA Pelz "NICHT MICH WILL ICH RETTEN!" Die Lebensgeschichte des Janusz Korczak 酒寄進一・訳 私だけ助かるわけにはいかない！コルチャック ほるぷ出版 1994 pp7
- (2) 塚本智宏 ヤヌシュ・コルチャック「子どもの権利」の探求 紀要 稚内北星学園大学
- (3) 塚本智宏 「コルチャック 児童の権利の尊重」子どもの未来社 2004 pp2-pp3
- (4) 塚本智宏 ヤヌシュ・コルチャック「子どもの権利」の探求 紀要 稚内北星学園大学 pp8
- (5) MONIKA Pelz "NICHT MICH WILL ICH RETTEN!" Die Lebensgeschichte des Janusz Korczak 酒寄進一・訳 私だけ助かるわけにはいかない！コルチャック ほるぷ出版 1994 pp12-pp23
- (6) 同上 pp24-pp25
- (7) 同上 pp26-pp27
- (8) 同上 pp26-pp33
- (9) 塚本智宏 「コルチャック 児童の権利の尊重」子どもの未来社 2004 pp52
- (10) 同上 pp52
- (11) MONIKA Pelz "NICHT MICH WILL ICH RETTEN!" Die Lebensgeschichte des Janusz Korczak 酒寄進一・訳 私だけ助かるわけにはいかない！コルチャック ほるぷ出版 1994 pp32-pp38
- (12) 同上 pp43
- (13) 同上 pp44
- (14) 同上 pp50-pp53
- (15) 同上 pp55-pp56
- (16) 塚本智宏 「コルチャック 児童の権利の尊重」子どもの未来社 2004 pp59
- (17) 同上 pp60
- (18) MONIKA Pelz "NICHT MICH WILL ICH RETTEN!" Die Lebensgeschichte des Janusz Korczak 酒寄進一・訳 私だけ助かるわけにはいかない！コルチャック ほるぷ出版 1994 pp57-pp58
- (19) 同上 pp58-pp59
- (20) 同上 pp59-pp59

- (21) 同上 pp81-pp91
- (22) 同上 pp97
- (23) 同上 pp107
- (24) 塚本智宏 ヤヌシュ・コルチャックの子どもの権利思想—子どもの権利条約の歴史的・思想的起源を求めて— 子どもの権利研究創刊号 子どもの権利条約総合研究所 2002 pp37
- (25) MONIKA Pelz "NICHT MICH WILL ICH RETTEN!" Die Lebensgeschichte des Janusz Korczak 酒寄進一・訳 私だけ助かるわけにはいかない! コルチャック ほるぷ出版 1994 pp123
- (26) 同上 pp138-pp139
- (27) 同上 pp165-pp167
- (28) 塚本智宏 「コルチャック 児童の権利の尊重」 子どもの未来社 2004 pp21
- (29) 同上 pp21

参考文献

- 松沢杏 「子どもの権利条約」についての考察—コルチャックの思想から見た日本の対応の問題点— 人間研究 日本女子大学教育学科の会 2001
- 吉岡久一・岡田英己子 社会福祉思想史入門 勁草書房 2000
- ヤヌシュ・コルチャック コルチャック先生のいのちの言葉—子どもを愛するあなたへ— 明石書店 2001
- ヤヌシュ・コルチャック 子どものための美しい国 晶文社 1988

